

令和7年3月24日

瀬戸市議会

議長 小澤 勝 様

報告書

～ガラス工芸品を地場産業として定着させるため～

都市活力委員長 富田 宗一

1 はじめに

瀬戸地区は国内最大の陶土・珪砂資源地帯であり、良質で豊富な陶土・珪砂原鉱に恵まれた地域である。瀬戸市の大部分は 1,000 万年以上前から約 200 万年前にかけて堆積した「瀬戸層群」という地層からできており、「瀬戸層群」では、やきものづくりに欠かせない「木節粘土」や「蛙目粘土」という良質な陶土と、ガラス原料となる珪砂を採取することができる。平成 31 年現在で陶土や珪砂を採掘する採掘鉱区の総面積は約 32.3 ㎢、瀬戸市の面積の約 29% に及ぶ。

このような豊富な資源を背景に、約 1,000 年前から陶器が、約 200 年前から磁器が生産されはじめ、現在に至るまで瀬戸市は国内有数の陶磁器の生産地となっている。

また、珪砂はガラス製品や建材・鋳鋼など日々の生活に欠かせない様々な製品に使われるものである。瀬戸地区は国内最大の珪砂資源地帯にあり、瀬戸産の珪砂は国内の珪砂資源出荷量の約 70% を占めている。

ところが瀬戸市においては、「せともの」という言葉があるように「陶磁器の街」というイメージは定着しているものの、全国シェアの 7 割を占める珪砂を活用した「ガラス工芸」については、本市の地場産業として認知がなされていないのが現状である。

そこで、当委員会では、全国最大の珪砂生産地としてガラス工芸分野の発展と振興を目指すべく、全国最大の産出量を誇る瀬戸市の陶土採掘場の視察や、ガラス工芸の研修を行っている瀬戸市新世紀工芸館の視察と意見交換、本市で産出された珪砂を利用したガラス工芸品やガラス棒・いずみパールなどが地場産業となっている大阪府和泉市の視察を行った。また、ガラス工芸を本市の地場産業として定着するに当たり、ふるさと納税などを通して地域特産品である「泉州タオル」の地域ブランド化に向けて取り組んでいる、大阪府泉佐野市への視察も行った。

2 調査研究の概要

(1) 令和 6 年 5 月 16 日 瀬戸市新世紀工芸館との意見交換会

新世紀工芸館は、陶芸・ガラス工芸分野の発展と芸術文化の振興を目指し、次世代を担う作家の育成を目的として研修生の受け入れを行っている。

まちづくりは人づくりといわれるように、新世紀工芸館で学んでいる研修生の方々と意見交換を行った。

その中で、瀬戸市は国内最大の珪砂生産地でありながら、その認知度が低く、ガラス工芸の街というイメージがほとんどないことに気づき、ガラス工芸も地域ブランドとして確立・定着させていくことが必要であることを実感し、そのためには地域ブランド化に向けて取り組んでいる地域を視察する必要性を感じた。

（２）令和６年７月２３日 愛知県珪砂鉱業協同組合と意見交換会および同組合が採掘している鉱山の現地視察

瀬戸市の珪砂の現状と課題について、愛知県珪砂鉱業協同組合と同組合の取り組みについて学習会および意見交換会を行った。

また、終了後は同組合が採掘をしている鉱山への現地視察を行い、採掘場で実際に珪砂が採掘されている状況や地層も確認することができた。また、陶土採掘場は非常に雄大な眺めであり、その風景もあわせて観光資源として活かすことができないかとの意見もあった。

（３）令和６年８月７日 大阪府泉佐野市への行政視察

ガラス工芸品を瀬戸市の地場産業としてイメージを確立・定着させるためには、そのしくみづくりを学ぶ必要があり、地域特産品である「泉州タオル」を地域ブランド化に向けて取り組んでいる大阪府泉佐野市へ視察を行った。

泉佐野市では、毎年約 100 億円をこえるふるさと納税を受けており、令和４年度は全国５位の約 137 億円であった。そしてふるさと納税返礼品の魅力を高めるためには地場産業の価値を上げることが必要であり、ブランディングの徹底や企業支援の補助金制度策定、地域の企業力を上げるための泉州オープンファクトリーの地域連携、企業連携、大学連携などを行っているとのことであり瀬戸市としても大変参考になる取り組みであった。

（４）令和６年８月８日 大阪府和泉市への行政視察

大阪府和泉市では、日本人造真珠硝子細貨工業組合と佐竹ガラスを視察した。和泉市の特産であるガラス細工は、瀬戸市から産出されている珪砂が原料であり、本市とはゆかりの深い産業である。

和泉市では、ガラスの加工技術を応用し人工真珠（いずみパール）を作ることでも昔から行われており、近年では本物と区別のつきづらい人工真珠がハンドメイドやアクセサリなどに使用され全国で流通している。行政が日本人造真珠硝子細貨工業組合と連携した地場産業のＰＲ、ふるさと納税返礼品としての販

売、イベントや地域への伝統文化を伝える活動などを行い、ガラス工芸品の認知度を高めようとしている点は本市としても大変参考になる取り組みであると感じた。

また、佐竹ガラスでは直売店が設置され、様々な種類のガラス工芸品が手ごろな価格で販売されており、ガラス工芸品に親しんでもらうためには良い取り組みであると感じた。

3 まとめ（意見）

瀬戸市が単に国内最大の珪砂生産地であることだけでは、ガラス工芸を本市の地域特産品としてのイメージを確立していくことはできない。地域特産品にしていくためには、ガラス工芸の付加価値を高める技術力がまず必要であり、後継者の育成なども課題である。

そのためには、(1)ガラス工芸品を地域ブランドとして押し上げていくための経済的な支援、つまり企業支援のための補助金制度創設、(2)ガラス工芸品の認知度向上のためにガラス工芸品を手ごろな価格で購入できるようなアンテナショップなどの設置が必要である。そして、市民と行政が一体となって地域ブランドとして定着させていく強い気持ちももちろん必要である。

(1)については、泉佐野市が行っているような地場産業品としての価値を上げるためのブランディングやPR、補助金制度創設などで企業や若手作家の意識の向上につながるような環境整備が参考になると思われる。

(2)については、和泉市の佐竹ガラス直売所のように、様々なガラス細工が手の届きやすい価格で販売されているような店や、吹きガラス体験のできる店などをオープンして、知名度を上げていく必要があると良いのではと感じた。

瀬戸市に和泉市のガラス工芸品やいずみパールなどを扱うアンテナショップを作り、瀬戸市産の珪砂を使用していることを大々的にアピールするなど、和泉市との交流を深めることで、本市のガラス工芸の技術向上にもつながる。

本市も日本遺産の街として地域の特色である陶芸技術や文化などを大切に守っていただくだけではなく、国内最大の珪砂の原産地であるという条件を活かし、陶芸だけではなくガラス工芸の街としてもアピールしていくことがさらなる観光資源になる。そして、瀬戸市の新たな魅力を向上させることが、人口流入の増加にもつながることを確信し、次の通りのまとめ(意見)とする。

今後、瀬戸市は国内最大の珪砂の原産地であるという地域特性を生かし、瀬戸市内でガラス工芸品を地場産業として定着させるために行政が支援体制を整えるべきである。